

令和六年気良歌舞伎

復活二十年気良座こけら落とし公演

仮名手本忠臣蔵七段目 祇園一力茶屋の場

配役 大星 由良之助

遊女おかる

寺岡平右衛門

大星 力弥

斧 九太夫

仲居

仲居

◆月の入る山科よりは一里半、息を切ったる嫡子カ弥、内を透かして正体なき父が寝姿起こすも人の耳近しと、枕元に立寄って鯉口ちゃん。

(ト向こうよりカ弥出で、しぐさあって枝折り戸の外に控える)

由良 アア、こりやのどが渴いた、これ誰たぞ水をもて……ん、こりや誰も居ぬのか。仲居ども、これ、水を持って、水を持……。こりや、誰も居ぬそうな……。アア、こりやこりや、きつう酔うたな。アア酔うた、酔うた。

(由良之助思い入れあって枝折り戸へきて)

由良 こりやカ弥、鯉口こいぐちの音響かせしは急用がしあつてのことか。

カ弥 御台顔みだいがおよ様より火急かきゆうの御状ごじょう。

(ト文箱を渡す、由良之助状を受け取り懐中に入れる)

由良 して、ほかに御口上ごこうじょうはなかつたか。

カ弥 ほかに御口上ごこうじょうはござりませねど、近々きんきん、かた……。

由良 敵かたきと見えしは群れいるカモメ、ときの声を聞こえしは、浦風鳴りけり高松の。

(謡調で一回りして様子をうかがったのち)

よし、よし。その方は宿へ帰り、夜よのうちに迎いの駕籠かご、行け、行け。

カ弥 ハー。

◆はつとためらう暇もなく、山科さして

由良 コレ、祇園町ぎおんまちを離れたら急げ。

力弥 ハッ。

◆引き返す

◆まず様子気遣いと、状まじの封ふうを切るところへ

(ト由良之助、状を読もうとするところ、奥より九太夫)

九太 大星殿、由良之助殿。

由良 オオ、こりや九太夫どの、久しいぞや、久しいぞや。一年も合わぬうち、寄ったぞや、寄ったぞや。

額ひたいにその皺しわのばしにお出でか。アノここな、むしろ破りめ。

九太 大功は細瑾さいきんを顧みずと、人のそしりも構わず、遊離ゆうりの遊び、大功を立つるのも基もと、あつぱれ大丈夫、

末頼もしう存ずる。

由良 ハハハハ、堅いわ堅いわ、石火矢いしびやと出かけたな。

九太 とぼけまい、まこと貴殿の放埒ほうちやうは。

由良 敵かたきを討つ手だてと見ゆるか。

九太 おんでもないこと。

由良 アア、かたじけない。四十を過ぎての色狂い、馬鹿者よ、気違いよと、笑わりようかと思うたに、敵かたき

を討つ手だてとは。九太夫殿、アアうれしいぞよ。

九太 ソリヤそこもとは主人塩冶殿の、仇あだを報ずる所存はないか。

由良 ア、気けもないこと、気けもないこと。家国いえくにを渡す折から城を枕に討死と云うたは、御台様への追従ついしやう。

時にこなたは、御上おかみへ対し朝敵ちやうてき同然と、その場をついと立った。我らは後にとしやちわっていた、きついたわけのう。ところで仕舞いはつかず、御墓みはかへ参って切腹と、裏門から、ヤ、こそこそこそ、ハハハ……。今、この様な安楽な楽しみが出来るというも、みんなこなたのおかげ。昔のよしみ、忘れぬ、忘れぬ。ササ、堅いは置いて碎けおれ、碎けおれ。

九太 いかさま、この九太夫も昔思えば信太しのだの狐、化けあらわして、一献酌いっこんくもうか。

由良 また頂戴ちやうだいとバイショめくのか。

九太 呑みおれ、さすワ。

由良 さしおれ、呑むワ。

二人 ン、こりや話せるわえ、ハハハ。

由良 コレ、仲居ども酒を持って、サア酒を、酒を持って。

(ト仲居が膳を運ぶ)

九太 由良之助どの肴さかないたそう。

◆そばに有り合う蛸肴、はさんでずっと差しいだせば

由良 手を出して、足を戴く蛸肴、どれ頂戴つかまつろう。

◆食わんとす、その手を押さえ

九太 由良之助、明日は亡君塩治どのの御命日、取分け逮夜は大切なるに、見事この蛸、食うじやまで。

由良 才、食るとも、食るとも。ただし主君塩治どのが蛸になられた、という便宜があつたか。ハテ

愚痴な人ではある、こなたや俺が浪人したも、元はと云えば判官殿の、無分別から起こつたことナリ

ヤ、恨みこそあれ精進する気はみじんもない。お心入れのこの肴、さらば賞翫いたそうか。

◆ただ一口に、味わう風情、邪知深き九太夫も、呆れて詞もなかりける

由良 この肴では、飲めぬ飲めぬ。サアいつもの通り、鶏しめさせ鍋焼きしよう。サア皆もサア奥へ来い、

奥へ来い。

(ト由良之助立ち上がる)

仲居 アモシ、お足元が。

由良 足元も、しどろもどろの浮き拍子。

九太 テレスク、テレスク、スツテンテン。

由良 おのれ、末社ども。

ササ、みなも奥へ参れ・・・。

(由良之助、仲居と奥に入る。九太夫だけ残る)

九太 ム、あの大馬鹿者の由良之助。主君の逮夜に蛸を食べるとは呆れたものだ。(刀に気づく)

しかも、城代家老ともあろうものが、刀を忘れるとは。(刀を抜く) イヤ、錆びたりな赤鯛。コリヤ、敵討などみじんも考えておらぬわい。(刀を戻して出て行こうとする)

イヤ、しかし、念のため……。

(九太、縁の下に隠れる)

◆折りに二階へ勘平が妻のおかるは酔い醒まし、早里なれて吹く風に憂さをはらして居る処へ

(トこのうち、二階の障子引き抜く、ここにおかる酔い醒ましの体にて居る。奥にて)

由良 由良之助ともあろう侍が、大事の刀を忘れたと言うでは済まぬ。つい取ってくるその間、掛け物をか
けなおし、^ろ炬の炭もついでおきや、ア、これこれ、そこな三味線踏み折るまいぞ。九太夫殿、いず
れへ往かれた、九太夫殿。これはしたり、九太夫殿はいず……。九太はもう、往なれたそうな。

(ト長暖簾を切つて落とす。これにて打ち込みの遠見を見せる)

唄◆父よ母よと泣く声聞かば、妻におうもの写せし言の葉、エエなんじやいなおかしやんせ。

◆辺り見廻し由良之助、釣灯笼の明かりを照らし、読む長文は御台より、敵の様子細々と、女の文の跡や先、参らせ候ではかどら
ず、余所の恋よと羨ましく、おかるは上より見下るせど、夜目遠目なり字性もおぼる、思いついたる延べ鏡、写して読みとる文
章……、下家よりは九太夫が、繰りおろす文月影に、すかし読むとは神ならぬ、ほどけかかりしおかるが簪、ぱったり落つれば、下には
ハッと、見上げて後ろへ隠す文、縁の下には猫笑つば、上には鏡の影隠し。

(由良之助は手洗いで杓を取り、一回水をすくって捨て、次に口に含み吐き捨てる、左手、右手とかけて雫を払って杓を置いた後、手を拭く。灯籠の火を大きくして、懐中より文を出し、灯籠の光で文を読む。

おかるは二階より延べ鏡にて写し見る。縁の下よりは九太夫忍び寄ってこの文を見る。おかるは簪を落とす、この音に双方びっくり。由良之助、右回りで文を後ろに隠す。この余端九太夫が持っていた文の先破る)

かる 由良さんかえ。

由良 わしを呼んだは誰じゃ。オオ、かるか。そもじはそこに何してぞ。

かる 私やおまえに盛りつぶされ、あまりつらさの酔い醒まし、風に吹かれているわいなあ。

由良 そんなら何か、そなたはあまりつらさの酔い醒まし、あの風に吹かれ……

(文の端が破れているのに気がつき)

そんなら何と云や。アノ、あまりつらさの酔い醒まし、あの風に吹かれて……、よう吹かれて、いやったのう。時にかかる、そもじに話したいことがあるが、何を云うても、屋根越しの天の川では話にならぬ、ちよつと下りてはたもらぬか。

かる 話したいとは、頼みたいことかえ。

由良 まま、そんなものじゃ。

かる そんなら廻つて来やんしよう。

由良 いやいや、段梯子だんぼしこへ廻つたら、仲居が捕らえて酒にしよう、オ、なんぞよい……オ、幸いここ

に九ツ梯子このつばし、これを使うこて下りてたも。

◆と、小屋根に掛くれば

(由良、下駄を履き、梯子を掛ける)

由良　ここから下りてたも。

か　　ここから下りるので。

由良　オ、そうじゃ。

か　　そうでござんすか、ようござんす。そんならここから下りるによつて、お前しっかりとよう押さえ

ていてくださせな。

由良　サアこのようにしっかりと押さえているほどに。サアちゃんと下りてたも。

か　　よう持っていて、アア。

由良　おおっと。

か　　オオこわ、こりやいつもとは勝手が違うて、危ないわいなア。

由良　危ない怖いは昔のこと、今は三間あかごうやくずつまたげても、赤膏薬としばいも要らぬ年配。

か　　阿呆あほ云わんすな、したが、なんじゃやら船に乗ったようで怖いわいなア。

由良　道理で船玉様が見ゆるぞ。

か　　マ、のぞかしやんすな。

由良 洞庭どうていの秋の月を拝み奉る。

かる そのような事云うたら下りやせぬぞえ。

由良 下りずば下ろしてやろう、逆縁ながら。

◆と後ろより、じっと抱きしめ（おかる、飛び降りる）

かる オオこわ。

◆抱き下ろし

由良 これはそもじの簪かんざしである（簪を拾ってかるに渡し）

かる そうでござんす、ありがとうございます。ありがとうございます。

由良 時にかかる、そもじは何ぞ御覧ごらんじたか。

かる アイ・・・、イイエ。

由良 イヤ、見たであろう、見たであろう。

かる 何じゃら、面白そうな文を。

由良 アノ二階から。

かる あい。

由良 残らず読んだか。

かる オオくど。

由良 南無三、身の上の大事とこそはなりにけり、ポウ、ポウ。

かる 何のこつちやぞいな。

由良 何のこととは、かる、古いが惚れた、女房になってはたもらぬか。

かる おかんせ、嘘じゃ。

由良 嘘から出た誠でのうては根が遂げぬ、サ、応と云や、応と云や。

かる 云うまいぞえ。

由良 そりやまた何故に。

かる お前のは、嘘から出た誠でのうて、誠から出た、みーんな嘘嘘。

由良 嘘でない証拠、御身請おみうけしよう。

かる イエ、私には。

由良 さ、間夫まぶがあるなら添わせてやろう、暇あひらが欲しくば暇もやろう。侍冥利さむらいみょうり、三日なりとも困うたら、

あととはそもじの勝手次第。

かる うれしゆうござんす、と云わせておいて、笑ろうでなあ。

由良 ハ、疑い深いやっちゃな、そんなら今の間に主あつじに金渡してくる程に、どっこへも往ってはならぬぞ

や。コレ女房どの。

かる それもたった三日。

由良　オオ、三日承知。

かる　エエ、うれしゅうござんす。

(ト手を合わせて嬉しきこなし)

由良　コレかる、この由良之助に請出さるるが、それ程までに嬉しいか。

かる　アイなあ。

由良　嬉しそうな、顔わいやい。

(扇子広げ)

三日承知、三日承知。

(由良之助奥へ入る)

かる　オオ、うれしやうれしや。うれしいといえはこの事を、父さんや母さんへちつとも早う。あ、そうじや、そうじや。

(トおかる、床の間の硯箱を出し、紙に文をしたためている。踊り地になり下手より平右衛門で手枝折り戸外へ来る)

◆折りから出て来る平右衛門

平右　ねいねいちよつと行って参ります。祇園ぎおんのちやや一力という茶屋ちややだけあって、こりや賑にぎやかなところだな

あ。そこのお女中じよちゆう、ちとものをお尋ねたず申します。この揚屋あげやに山崎やまざきから来た、かるといおなごう女子はおら

ぬか。御存じならどうぞお教えなされて下され。

かる ちよつと待ってくださいな。わたしや今急ぎの用をしている程に、そのような事は仲居衆に聞いてくださいな。

平 右 確かにこの家と聞くよりこうして参りました。実はナ、その女子と会って、云わねばならぬ大切な用事がござります。どうぞ御存じならばお教えくださいな。コレお女中、どうか御存じならばお教えなされて下さりませ、その女子に会って云わねばならぬ大事な用事がござります。この通りお願いを申し上げます。どうぞ御存じならばお教えくださいな。そうして意地の悪いことをせずと、どうぞ御存じならばお教。オイお女中、お女中、この通り、この通りお頼み申します、お頼み申します。頼む。頼む。

かる マア待つてくださいな、なんじゃいなア、私が急ぎの用をしている傍で、お前がその様に頼む頼むとくどう云わしやんすによつて、それ見やしやんせ、頼む頼むと書いてしもうたじゃないかいナ。どうも申し訳ございません。

かる そんならこうしやしやんせ、その廊下を行くと広い座敷があつて、そこへ大勢の仲居衆がいるほどに、そこへ行ってきいたらいち早い。

平 右 イヤ誰に聞こうが勝手がわからず、最前から迷惑をいたしており。そんなことを仰らず、ど

うぞちよつとお教えなされて下さ……。

(トよくよく顔を見て)

ヤ、わりや妹じゃないか。

かる ハ、お前は兄さん。

平右 ア、やっぱり妹だ。

かる 面目ない面目ない、面目ないわいな。

平右 なんの、面目ねえことがあるものか、関東よりの戻りがけ、ははじやひと母者人に逢うて詳しく知った。お主のしゅう

ため、夫のため、よく売られた。でかした、でかした、オオ、でかしたナ。

かる そんならお前叱ってじゃないかえ。

平右 なんの叱っていいものか、オイ兄はナ、誉めてらい、ほ誉めてらい、ほ誉めてらい、ほ誉めてらい。

かる マア、兄さん。

平右 オオ、妹。

かる 会いたかった。

平右 俺も会いたかったよ。

二人 会いたかった、会いたかった……。

平右 オイ妹、すまねえがな、ちよつと立ってみてくれ、立ってみてくれ。

かる あのと、こうでござんすか。

平右 アア、そうそう、そっちを向いてくれ、そっちを向いてくれ。

かる こうでござんすか。

平右 オイ妹、おめえ久しく会わねえ内に、大層たいそういい女になったナア。

かる マア何を云わしゃんすのえ。したら兄さん、お前も御無事で、このような嬉しいことはないわいな。

アもし、兄さん、お前に会うたら何よりもいつち早う聞きたいはナ。ソレあのと、か……。

平右 か……？

かる か……。

平右 か……？

かる ……母かかさんはお達者でござんすかえ。

平右 母者人か、母者人はナ、未だいまにめがねもかけず、夜なべ仕事をなさっているわえ、お達者だ、アアお

達者だ、お達者だ。

かる 母さんのはあのと、お達者でござる、アアそうでござんすか。それからあのと……、父さんはえ。

平右 親父さん……、親父さまもお達者だ、アアお達者だ。

かる そんならあのと父さんもお達者でござんすか、あのご無事で。

平右 アアご無事だ、ご無事だ。

かる アアうれしや、うれしや。それでは父さんもお達者、母さんもご無事、それからあの、か……。

平右 か……？

かる か……。

平右 か……？

かる もしや兄さん、お前も大概察^{たいがい}してくれたが良いわいなあ。

平右 何の事だか、この兄にはさっぱりわからなねえ。

かる それいなア兄さん、それあの、か……。

平右 か……？

かる 勘平さんはえ。

平右 勘平……、か……勘平も達者だ。達者、達者、大達者だ。

かる ヘエそんなら勘平さんも、アノ、大達者でござんすか。

平右 無事だ、無事だ。

かる ほんまに御無事でござんすか。

平右 アア無事だ、無事だ。

かる うれしや、うれしや。それ聞いてわたしや、ようよう落ち着いたわえ。

平右 そうか、そうか、そりやよかった。

かる もしや兄さん、うれしいと云えば、お前をよろこばすことがござんすえ。

平右 何だ俺をよろこばすとは。マ、殿様お果てなされてから、うれしい話をこれっぱかりも聞いたことがねえ。サアサア、どんな話だか早く聞かせて、この兄をひとつよろこばしてくれ。

かる わたしや今宵こよい請け出さるるはずじゃわいなあ。

平右 エ、お前が請け出され・・・。

かる アイ。

平右 ソレ見ねえ、お主しゅうのため、夫のため、お前がこうして苦難くなんに身をしずめ、天道様てんとうさまはご承知しょうちだ。そしてそりや、どなたのお世話で。

かる お前も知つての、大星由良之助様のお世話でナア。

平右 ナニ、御城代ごじょうだいの由良之助様のお世話、アアそうおか、それじゃあお前、下地したじからの馴染なじみでもあつてのことか。

かる 何のいのなあ、この中じゅう二三度、酒さけの相手に出たばかり、間夫まぶがあるなら添わせてやろう、暇がほしくば暇やろうと、結構すぎた身請けの相談。

平右 それじゃお前を下地したじからの馴染なじみでもなく、あの御家老ごからう・・・。アわかった、それじゃあお前を勘平にようぼうが女房にようぼうと御存じごぞんあつてか。

かる 知らずじゃぞえ、親夫おやおつとの恥なること、何の明かしてよいものかいなあ。

平右 ム、それじゃお前が勘平が女房とも御存じなく、下地からの馴染みでもなく……ア、われを請

け出す、あの御城代の、あの由良之助さ……

かる あいなあ。

平右 ウム、すりやいよいよ本心放埒、お主の仇を討つ気はねえに極まったナ。

かる 兄さん、あるぞえ、あるぞえ。

平右 エエイ、あるとは何が。

かる 高うは云われぬ、もし。

◆(こ)う(こ)う(こ)うと(さ)さ(さ)や(け)ば

かる じゃわいなあ。

平右 ウム、そんならその文、残らず読んだか。

かる 残らず読んだそのあとで、互いに見合わす顔と顔、それからじゃら、じゃら、じゃらつきだして身請

けの相談。

平右 ン、そんならその文残らず読んだそのあとで、互いに見合わす顔と顔だナ。それから、じゃら、じ

やら、じゃらつきだして、身請けの相談……。ヤ、ちよ、ちよつと待てよ。そんならその状残らず

読んだその後で、互いに見合わす顔と顔、それからじゃら、じゃら、じゃらつき出して身請けの相談……。

読めた、こうだ、こうだ、こうだ、こうなつちやならねえところだ。御家老様、あなた様がお心

とはつゆ知らず、最前さいぜんよりの悪口あくこう雑言ざうごん、エエ、よくこの口がまがらなかつた、どうぞご勘弁かんべんください、あなたがそのお心なら何もお手をお下しなさるまでもございませぬ、こいつは、こいつは私の妹でござりまする。ええ、よろしゅうございます、只今ただいま、妹でもすっぱりと……、ハハ……。

かる
ホホ……。

二人
ハハハ……。

平右
オイ妹。

かる
アイ。

平右
こりや久しぶりだったなあ。

かる
アイナア。

平右
その久しぶりであったお前に、この兄がちつとばかり頼みがあるんだが、何と聞いてはくれめえか。
かる
ほかならぬ兄さんの頼み、なんなりと聞こうわいな。

平右
その、その頼みというのはナ。

かる
そ、その頼みとは。

平右
その頼みは。

かる
その頼みとはえ。

平右
妹、そちが命は兄がもらった。

(ト平右衛門は抜き打ちに打ってかかる、おかるは早くも身を退き)

か 　　る　　モシ兄さん、私には何科なにとがあって、勘平という夫もあり、きつと二親あるからは、お前のままにはならぬぞえ。トさあ云うたが悪けりや謝ります、請け出されて親夫に会おうと思うが私の楽しみ。悪いことがあるなれば、どんなことでもあやまろう、もし兄さん、手を合わせて拝むわいなあ。

◆手を合すれば平右衛門、抜き身を捨ててどうと伏し、悲嘆の涙にくれけるが

平 　　右　　こりやあ、この俺が悪かった。訳も云わずにいきなりお前を切りつけ、イヤこりやこの兄が悪かった。オイ、オイ妹、今なその訳を話して聞かしてやる。サアちよつと、ちよつとここへ来てくれ、来てくれ、来てくれ。

か 　　る　　そうでござんすか、お前諸身は、いきなりわたしを切ろうとしやして、この様なマアびっくりしたことはございませぬぞえ。ようござんす、すぐにナ、そばへ行く程にナ……。ア、もし兄さん、めつたにそこへは行かれぬわいな。

平 　　右　　なぜ来られねえんだ。

か 　　る　　その様にお前、刀を持っていやしやんしては、わたしや怖うて行かれぬわいなあ。

平 　　右　　なんだ、この刀が怖え。ええい何を云うんだ。お前も早野勘平という侍さむらいの女房にようぼうじゃねえか。

か 　　る　　それじゃと云うてお前、私がそこに行ったらまた切ろうとしや。

平 　　右　　アアそうか、よし、よしよし、わかった、わかった。ちよつと待ってる、ちよつと待ってる。それじ

やなナ、お前がそんなに云うなら、ソレ刀さやこうして鞘さやへ納めて、ソレお前に渡してやらあ。サアだから早く来てくれ、早く来い。

かかる そうでござんすか。そんならナ、今じきに傍そばへ行く程に、お前ちよつと……。モシ、兄さん、それまだあるわいなア。

平右 まだある。

かかる まだ腰にお前残っておるじゃないかえ。

平右 これか、オイこれはお前、武士ぶしの魂じゃねえか。

かかる それじゃというて、それがあつては行かれぬわいな。

平右 そうか、そうか。よし、よし、それじゃあナ、これもいいか、こうやって、サ、お前に渡してやらあ。

もう、もう何にもねえ。何にもねえから、サア早く来い。

かかる そんならナ、すぐに傍そばへ行くが、ほんに最前のようにびっくりしたことがございません。お前マアものも云わずいきなり私のことを切ろうとしやしゃんして、お前……。

平右 エエ、まだ来ねえのか。

かかる 何じゃいな、兄さん、その様な怖い顔して、わたしやそこへは行かぬぞえ。

平右 何だ俺の顔が怖え。エエ何を云うんでい。この怖え顔は俺の生まれつきで仕方がねえや。

かかる そんなら兄さん、ずーっと向こうへ行つて、あつちや向いていて下さんせい。

平右 何だ、ずーっと向こうへ行つてあつちを向いてろ、いろんなことを云うやつだ。アアよしよし、わかつた、わかつた。それじゃあナ、これならどうだ、これでいいか。サア早く来てくれ、早く来いよ。すぐに傍そばへ行く程に。ちよつと待っていて下さんせや。モシ兄さん、そつちや向いていて下さんせ。こつちを向いてはならぬぞえ。

平右 よしよし。

かる よござんすか、よいかえ。そんなら、行くぞえ、行くぞえ。

(かるは大小を下手へかくし、平右の後ろからしつかり抱きしめる)

かる 兄さん来たが、何じやいな。

◆顔つくづくと打ちながめ

平右 髪かみの飾りに化粧して、その日その日は送れども、可愛いや妹、わりや何にも知らねえな。

かる ナニ知らぬとはえ。

平右 じゃあ今兄が話すこと、必ずびっくりするだろう。我がナア、請け出されて孝行してえと云う親、
与市兵衛よいちべえさまはな。

かる 父さんがどうぞしやしやんしたか。

平右 六月二十九日の夜、人に斬られて、お果はてなされた。

かる シエ……。

(トびっくりのこなし)

平右 コレコレコレ、びっくりするナイ、まだ後にはどえれえのが控えている。妹、われが請け出されて、会いたえ、添いてえという勘平はナ。

かる エ、勘平さんがどうぞしやんしたか。

平右 そ、そ、その勘平は……。

かる 勘平さんは。

平右 か、か、勘平は……。

かる か、か、勘平さんは……。

平右 勘平で、やっぱり勘平だい。

かる なんじやいな、ア、良い女房にようぼうさんでも持たしやんしたかいな。

平右 エエ、そんな陽気な事じゃねえわい。

かる そうして兄さん、勘平さんはえ。

平右 人に立たねえことあつて、腹切つて死んでしまった。

かる エ……ムウ。

◆とびっくり差し込む癪

(トおかる気絶、平右衛門いろいろ介抱)

平右 待ってくれ、待ってくれ、兄が水を持ってくるからな……。

おかる、おかるやあい。

◆ ようように顔を上げ

(おかる気づけ)

平右 兄だよ、兄だよ、兄の顔がわかるか。

か 兄さん、わたしやどうしよう。

平右 もっともだ。

か どうしましょう、アアどうしよう、アアどうしましょう、どうしよう……どうしようぞいなあ。

◆ これのうと取りついて、わつとばかりに泣き沈む

平右 おいたわしや母者人。ははじやひと このことを云い出しては泣き、思い出しては泣き、娘かるに聞かしたら、泣

き死にするであろう、必ず云うてくれるなど口止めされて来たなれど、云わねばならぬ今宵の仕儀、

という訳はな。いぢず 忠義一途に凝り固まった由良之助様、勘平が女房と知らねば、請け出す義理もなく、

もとより色には猶耽らず、なほふけ 見られた状が一大事。じょう 請け出して刺し殺す、しあん 思案の底と見て取った。も

しそうのうても壁に耳、ほか 外より漏れてもそちが科。とが オイ妹、なぜそんなものを読んだのえ、とても逃

れぬそちが命、兄が手にかけ首にして持って参りましたと、それを功に連判の数に入ってお供にた

ん。

◆小身者の悲しさは人に勝れた心底を

平 右 見せにやあ数にやあ入られねえ、サアサアサア、その道理を聞き分けて、死んでくれ、命をくれ、命をくれよ、こりや妹。

◆事を分けたる兄が詞、おかるは始終せき上げせき上げ、便りのないは身の代を、役に立てての旅立ちか、暇ごいにも見えそなものと、恨んでばっかりおりました。

か る もつたいないが父ととさんは、非業ひがしな死でもお年の上、勘平かんへいさん、勘平かんへいさんは三十に。

◆なるやならず死ぬるとは

か る さぞ悲しかろう、口惜しかろう。

◆会いたかつたであろうのに、なぜ逢わせては下くださんせぬぞいな

か る 親、夫の精進さえ、知らぬ私の身の因果、何の生きていられましょう。サア私が死んでお役に立つなら、ちつとも早う手にかけて。

平 右 いい覚悟だ、南無阿弥陀仏。

か る ア、もし。

◆お手にかからばかかさんが、お前をお恨みなされましょ。

か る 自害したそのあとで、お役にたてて下くださんせ。兄さん、さらばでござんす。

◆言いつつ刀を取りあがる

(このとき奥より)

由良 やれ待て兩人早まるな。

(由良之助奥より出る)

心底見えた、兄は東あずまの伴を許すぞ。

平右 ヘエ、そんならアノ、東あずまのお供を、お許しなされて下さりまするか。これ妹、兄はな、兄は東あずまのお

供がなかった、東あずまのお供が、なかった、なかった、なかった、なかった、ネイネイ、ありがとうございます。
ざいまする。

◆天へも昇る心地して、勇み立ったる門出のよろこび。

由良 さりながら、夫勘平、連判に加えしかど、敵一人も討ちとらずば、未来で主君に言い訳あるまい。そ

の言い訳は、これ。

◆ともぎ取る刀をしっかりと持ち添え、ぐっと突っ込む縁の下、下には九太夫肩先縫われて七転八倒

(ト下へ降り、おかるの手を持ち添え、縁の下へ突っ込む、九太夫わつと苦しむ)

由良 ソレ、平右衛門、引き出せ。

平右 ハッ。

(平右衛門床下より九太夫を引き出し、由良之助九太夫の襟髪掴んで引き寄せ)

由良 獅子身中の虫とは、汝なんじがこと。我が君より高禄こうろくを賜り、莫大のご恩の着ながら、敵師直かたきが犬とな

つて、あること無いことよくも内通ひろいだな。こりややい、四十余人の者共は、親に別れ子に離れ、一生連れ添う女房を、君傾城の勤めをさするも亡君の仇を報じたさ。寢覚めにもうつつにも、殿ご切腹の折柄を思い出しては無念の涙、五臓六腑を絞りしぞや。とりわけ今宵は殿の逮夜、口に諸々の不浄を言えど、慎みに慎みを重ねる由良之助へ、よう魚肉を突きつけたな。否と言われず、応と言われず、咽を通せしその時は、五体も一度に悩乱し、四十四の骨々も砕くるようにあつたわやい。夜叉め、魔王め、こな獄卒め。

◆土にすり抜けねじつけて、無念の涙に暮れけるが

(扇子でちようちようと打ち据える)

仲居 由良さん送るかえ

由良 おおサアサア、送れ、送れ。

(二重に上がり)

平右 いっそ、下郎が。

由良 コリヤコリヤ待て、平右衛門。喰らい酔うたる客人の、加茂川でな、

平右 ハハ。

由良 水雑炊を喰わせよ。(扇子を開く、チョン)

(平右衛門、九太夫を肩)

(皆引っ張りの見得)

(幕)